
普通で非凡な御曹子！

浅井 礼螺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

普通で非凡な御曹子！

【Nコード】

N7066I

【作者名】

浅井 礼螺

【あらすじ】

梁瀬静流十五歳、成金両親の所為でぶち壊された十五年間は戻って来ないけど、これからの人生は——誰にも邪魔なんてさせるもんか——！

”普通”に憧れる御曹子の、波瀾万丈高校ライフ！

序章・彼の名前は梁瀬静流。

「……………」

俺は某私立高校の校門前に立っていた。そろそろ流れるようにそこに吸い込まれる人々の波の中一人だけ堂々と立ち尽くし、校舎を見つめる俺。きつと浮いているだろう事実からは目を逸らしている、だから言わないでくれ。

——今日此処から、俺の人生が始まるんだから。

保育園児だった頃。

「しーくん、おかーさんにしーくんとおえかきしたお話をしたら、しずるくんには絶対ごめーわくかけちゃだめよって言われたのー」

どうしてかな？ 俺を見て、同じ保育園の友達は首を傾げた。その話を横で聞いていた保育園の先生は、

「そんなことは無いのよ？ しずるくんだけが特別な訳じゃないの。先生にとってはみーんなが特別よっ！」

そう言ってニコリと笑った。小柄で優しく、皆から好かれる先生だった。

けれど、そう聞いた次の日に悪ふざけをして階段から落ちた俺と友達を見て、

「しっしずるくん……!?!? どうしよう……しずるくん何かあったら私、クビになっちゃう……!?!」

友達のことを気にせずにそう言ったのを聞いて嫌いになった。

小学生になって。

授業参観日の時に、

「梁瀬ー! お前授業中寝てただろー?」

と言ってきた友達に対して、そのお母さんがニコニコと俺達を見ていた。

けれど。

「梁瀬君に何言ってるの!! 失礼なこと言わないのって何時も言ってるでしょ!? 後で御家族から何か言われたら――!!」

その友達がそう怒られているのを見た。それから余り話さなくなったのを覚えている。

中学生になって。

「梁瀬君、おはようございます」

「梁瀬君、おはようございます、今日も良い天気ですね」

もはや誰も俺に近付く者は居なかった。近付く者といえばただ金目当ての腐れた輩のみ、後は同級生からの敬語の嵐だ。宿題を忘れた時だって、

「何時提出してくれても構わないですよっ！ い、急がないで良いですから！！」

そう担当教師に言われたことは数えられる程ではない。教師にまで敬語を使われた長い三年間。

俺の武勇伝は他にもあるが、それを今語るには時間が少な過ぎる。第一、それを説明するなればきつとたった一言で済むだろう。

父親は某有名大学卒業後に設立した会社——今では大手IT企業の一角を担うそれ、梁瀬財閥のやり手社長。

母親はその父親と共に会社を支えるやり手女秘書。

そしてそんなやり手二人の間に生まれた息子こそがこの俺、——梁瀬静流その人であるからして。

ひとつ怪我をすれば母親が大袈裟に事を荒立て、その幼稚園の先

生の人生ごとぶち壊しそうになった。

ひとつ俺が友達との悪ふざけした話をすれば、お宅の子の所為でうちの子が汚れた事をした、だの言って。

人生の敗北、というものを知らない両親二人は何時だって傲慢で高飛車で、それでいて常識ってもんが抜けてるからタチが悪い。裕福な思いはしてきたが、楽しいと思えたことは数少ない。両親を恨むつもりはないけれど、そういう生活にはもう懲り懲りだ。

——だからこそ。俺は今日ようやく、そんな生活からおさらばするんだ。

高校に進学するにつれて俺が選んだ高校は、自宅から二県も離れた場所に存在する全寮制の高校。リムジンやらロールスロイスやらが入りするどでかい門があるとか、玄関に入ってすぐのリビングに豪華なシャンデリアがあるとか、中庭のみで野球出来んじゃねえとか、使用人居過ぎじゃねえとか、そんなことを思わなくても考えなくても良いように。

——自由が無いとか楽しくないとか生きてる心地がしないとか!!

世間から贅沢と罵られようとも、両親に全力で反対されようとも、俺は今日この時から自由を手に入れるんだっ!! 家との絶対疎遠——それが俺の選んだ方法だった。

では冒頭に戻ろう。

俺は大地を踏み締めて、その流れに流されるように校門をくぐった。

一学年の総計は千人を越えているこの高校、そんな中で俺が見つけられるなんてことがあるはずもない、梁瀬という苗字も一人ではないしな。

俺は梁瀬静流、梁瀬グループ御曹子梁瀬静流ではなく、ただの高校生、梁瀬静流だ。

今日から始まる明るい人生に心を踊らせながら、俺は力強く歩み続けた。

4月、初めての環境、初めての友達。

俺が通うこととなった此処——雅一魅剣学園は、都心からは少し離れた場所にある高校である。だからこそ全寮制、だなんて場所取るシステムを取れるのだろうと俺は思った。

学校そのものは他の私立とは何等変わりない——といっても私立校自体充分広いし——し、寮だって広いといえば広いけど、少しお高い偏差値の学校ならば別におかしくはない広さだと思う。要するに、この学校の凄いところは他にあるのだ。……ぶっちゃけそんなに溜めて言うことでもないんだけれどな、考えれば直ぐに分かる。

——そう、学費の安さ。

詳しい金額はよく知らないけど、他の私立校と比べてしまえば雲泥の差、都心から離れているだなんてリスクは全然無くて、今時よくあるお受験競争の指定校としても有名なのだ。

ちなみにこの俺、梁瀬静流はそんな有名校に指定校推薦を頂きました。ふっ、頭脳の明晰さを自慢してやったぜ。——友達が出来なくて勉強しかやることが無かった、なんてことは断じて無い。……無いからな!!

とにかく、これから通う雅一魅剣学園——魅剣学園と称される訳で——のことは、施設が充実している高校——くらいに思っただけは良いと思う……うん。

「次、梁瀬!」

「え——あ、はい！」

教室の一角、梁瀬という苗字から窓際ど真ん中をゲットした俺の耳に飛び込んできたのは、清々しく響く担任教師の声。格好良い、のかどうかはよく分からないけど、それなりに若い眼鏡の男性教師が俺に視線を向けている。

そうか、今は自己紹介タイムだった。今までそういうイベントで名前を名乗ることすら億劫だった俺としては、今初めて開放感に満たされている。名前を名乗れることが嬉しいって初めて知ったぞ！

「梁瀬静流です、部活とかはまだ決めてないんですが、これから皆と楽しくやっていけたら良いなって思ってます」

嗚呼、皆の視線が俺を捕らえている。アレは興味の視線だ、決して今までのような、義務的意味を込めた視線ではない……！特に真ん中の列の一番後ろの君！俺を見ていないじゃないか！良いぞそのカンジ！お前に興味ねえしー、みたいなソレ……！（※感受性が少しイカれていますが正常です）

立ち上がったの自己紹介を終えれば、小さいながら拍手が鳴る。やべえ、このとりあえずしとけ、みたいな拍手が心地良い……！俺が何かすれば鳴るあの大喝采みたいな拍手じゃないことに感激を覚えてるぞ俺！（※精神的も少しイカれていますが正常です）

そしてなんやかんや考えている間に自己紹介タイムが無事に終わって、数分の自由時間がやって来た。この高校って遠方から来た人も多いから友達作りが大変みたいだ、直ぐ様近くの人に声をかけるクラスメートの姿を見てそう思うけれど——俺はどうしよう？ていうかぶっちゃけ、今まで友達居たことなんて稀だし？ そんなもん忘れちゃいましたよ、ええ。

……どうしょ。

「やーなーせ！」

そんな時であります、背後から肩を叩かれました。

本気でびっくりして後ろに振り返りつつその手を掴もうとしたら、その手を綺麗に掴み損ねて叩き落として、机と椅子の狭間に突き落としました。

その時その腕がグキツて言いました、これぞ槌子の原理ー、ーじゃなくて!!

「わー！ ご、ごめんごめん!!」

「い、痛ったあ……お前勢いつき過ぎや……こっちがフレンドリーに話しかけたんが馬鹿みたいやんか……」

反時計回りに振り返った俺の後ろに居たのは、普通に俺の後ろの席の人でした。机にうなだれているけど多分そう、うん、多分。確か名前は……

「ごっ、ごめんねー横谷君」

だった気がする。

「へーきへーき、少し痛かっただけや、そんな心配しなくてええて」

合ってた、良かった。

横谷君はさっき俺が突き落とした方とは逆の手ー要するに右手をヒラヒラと振れば、にこやかな笑みを俺に向けてくれた。うああ……良い人や……！ ……俺は感化されやすかった。

「んじゃ改めて。こうやって同じクラスになったんも何かの縁、せやからお互い仲良くしよな？」

「う、うん、ありがとう、宜しくね、横谷君」

「阿呆、仲良うしよなーつつてんに、苗字で呼ぶ奴が居るか」

名前でええよ、横谷君は呆れ顔から一転して再び笑顔で言ってくれた。よ、横谷君を名前で……？ そんな、良いのかな、俺なんかが呼んでしまつて……！

「じゃ、じゃあ……——柎臣くん？」

「おう、上出来や静流！」

ぐふはあっ！！ 名前で呼ばれた！！ 超嬉しい……！！！！

しかしこんなことで悦んでいるのは只の変人だと思われてしまう。俺はあくまでその感情を外に出さぬよう心掛けた。普通に笑えてるよな、俺……？

「中学の知り合いとか、あんまし居いへんくてなあ……。静流は誰か居るん？」

変な笑い方をしていなかったようで何より。柎臣くんはだるっだと言わんばかりにべちゅん、と机に伏せながら俺を見た。

「え、ううん、全然。此処受験したの俺だけだし、だから友達も誰も居ないんだよね」

っていうか何処行つたつて俺に友達なんて居ないけどね！ ちっ

きしょー！

「そかそか、まあ魅剣やもんなあ、競争率半端無いし」

「あははっ、そうだね」

「……」

……ん？ どうしたんだろう榎臣くん、急に黙り込んだじゃった。
俺の顔に何か付いている、とでも言うのかじつと俺を見遣る榎臣くん。
……まさか、何かへマったか……？

「ま、榎臣くん？ どうかした？」

「――……ん？ あ、嗚呼、何でもあらへんよ、気にせんというて」

けれど彼、榎臣くんは俺にへらり、と笑顔を向けてくれれば右手を舞わせてそう言った。気にするなと言われたからには気にしないけど、気にならないと言えば嘘になるかな。

その後も暫し榎臣くんと適当な話で盛り上がって、本日の学校は終業を迎えた。初日だからね、こんなもんだろ。もう少しくらい榎臣くんと喋っていたかったなー、とは思ってたけど、この後はこれから住むことになる寮の自室に行かなければならない。明日から学校だし、早めに行って早めにあの段ボールの山を整理しなければ。

「それじゃ静流、また明日なー」

「うん、じゃあね榎臣くん！」

そういうことで榎臣くんも忙しいだろうから、そろそろと寮に帰る生徒の波に紛れるようにして俺達は別れた。

高校で初めて、そして久しぶりに出来た友達――横谷榎臣くん。

出だしは順調だ！　だなんて浮かれた気持ちで隠さずに、俺は足取り軽く自室へと向かうのだった。

・ 銀（しろがね）色のルームメイト。

「ええと、……あつた！」

——“220”、扉の横にある表札代わりのネームプレート上、どの扉の横にも書かれているその数字を頼りに、俺はこれからの住まいとなるその部屋番号に辿り着いた。三ヶ所に高々と連なる九階建ての寮、その中の西寮二階一番端、それが俺の部屋、正確には——俺達の部屋だけだ。

魅剣学園の寮は二人で一部屋、よって俺にも例外はなく、この“220”号室の相部屋で、俺の知らない誰かと共同生活を強いられることになるのだ。強いられるといっても、今までのこと考えれば辛くも何ともないんだけどさ。

——共同生活……事前の説明書類にはその人の名前しか書いていなくて、実際に会うのは今日が初めてだ。怖い人とかじゃなければ何だって良いけど、確かひとつ先輩だって書いてあつたな……。先輩……一体どんな人なんだろうか。

俺はちらりと、今度は部屋番号ではなくてネームプレートを見遣る。

「……あ」

“有哉木 稜”

同居人の名前——読み方がイマイチ分からないんだけど——、その下のスペースに見付けた、もうひとつの名前。

“ 梁瀬 静流 ”

上と同じ文字、下手という訳では無いけれど、上手いというには余りにも投げやりに書かれたその文字。書いてくれたんだな、これ。達筆なんかじゃ全然ない、だけれど俺はこのネームプレートを見ただけで嬉しくなって、これから会うことになるその先輩と早く仲良くなれたら、そう思った。

自然に笑みが零れてしまうのは——止められそうにない。

ぴんぽーん——

乾いた音が室内に響いている。寮だけあってシンプルイズベスト、ただ誰かが来たことを知らせるだけの、そんな呼び鈴。間が空いたもんだから少々——否、かなり焦ったけれど直ぐにどたと此方に近づく足音がした。ゆうやぎ、ゆやき、……畜生読めない。読めないまま、これから住む部屋の鍵が、かちやり、と開く音がした。

「あーい」

「あ、あの！ 初めまし……て……」

キィ、という弱々しい音と共に出て来たのは、つい言葉に詰まってしまう程綺麗な銀糸の髪を持つ青年だった。ワックスを使って髪を立て、瞳の色は灰、身長はざっと百七十前後——俺よかちよつとばかり高いみたいだ。随分と整った顔立ちの方だけれど、服装は変なロゴ入りの伸びきった真白いTシャツに地味に廃れたジーンズ、……正直適当にも程がある。

「……あえ？　うえ、……あ？」

——しかも寝起きっぽい。というか寝起きだからそんな格好なのか、……あれ、もう正午過ぎてんだけど。しかし何やら部屋の一点をじっと見て、何かに気付いたらしく先輩と思わしき彼は、その灰の瞳を擦りながら俺を指差した。何も発されずに開いた口は数回開いたり閉じたりを繰り返したけど、恐らく俺という新入生に気付いたのだろうと察すれば一度同意を込めて頷いた。そうすることで彼の表情は明るめられ、扉が全開に開け放たれた訳だ。眠気眼だった瞳も表情と共に覇気を取り戻している。

「ハジメマシテ、梁瀬静流クン。……だよな？」

「はい！　これから宜しくお願いします！」

挨拶は肝心。こればかりは両親から学んだ習慣だから少しばかり小憎たらしい。状況に寄ってはニヒルとも取れる笑み——口角を吊り上げるだけであって、どんな感情にでも使用出来る笑み——を浮かべながら入れよ、と促してくれる彼に精一杯の誠意を込めてそう言えば、少しばかりきょとん、としていたけれど。

「おう、コチラこそ、だよ」

呆れ顔でそう返してくれる彼を見れば、何だか楽しくなりそうだと夢にまで見た普通の学生ライフに光が差した気がした。

「じゃ、あ、……ええと、——悪イ、ちょっと共有ルーム片付けるわ」

部屋の広さは2LK。リビングキッチンが共有ルームとなるらしく、他二部屋の内片方が俺個人で使用して良い部屋になるらしい。2LKといってもリビングは呆れるくらい普通の広さだし、風呂とトイレも別、風呂の大きさは一軒家宛らの大きさだ。ダイニングはリビングと兼用、ってところか。

彼——そろそろ読み方を聞き出さねば——はそんなようなことをリビングにて俺に説明すれば、部屋の至る箇所に散乱する私物に視線を走らせて苦笑した。暫く一人暮らし同然だったらしい先輩は、どうやら余り掃除が得意ではないらしい。キッチンの様子からも見て取れるが、料理もそんなにしないみたいだし——よし、此処は俺の出番だな。

「俺も手伝います！ 俺家事得意なんで！」

「マジ？ そりゃ助かる。——オマエの荷物は全部部屋に運んどいたから、後で手伝ってやんよ」

「本当ですか？ ありがとうございます！ ……ええと」

「稜でいーよ。苗字読みにくいし」

自分でも読みにくいんだ、俺は内心でそんなことを考えた。

共有ルームを片付けながら世間話がてら話していれば——まあ俺からしてみればこうやって気さくに会話が続くことに感涙モノなんだけど——、稜先輩の苗字は“有哉木”^{ゆかなぎ}と読むことが判明した。有哉木 稜、確かに読みにくい、というか個人的に読めなかった訳だが稜先輩……か。明るい人で良かった、本当に。ていうか稜先輩だつてよ、名前だよ名前、枉臣くんもそうだけど名前呼びって良いよね。俺昔名前で呼んだだけで『梁瀬さまに名前で……！ あ、あ、ありがとうございますうううううう！』って言われたことあるんだよね、普通に呼ばれてくれる人って貴重。共有ルームの簡単な片付けが終わって、稜先輩は一度ソファにて休憩中。俺はこれから迎える寮生活にテンションが上がりっぱなしだから休む気には慣れず、色々と部屋の散策に入った。

キッチンも凄く普通だ、冷蔵庫——中身は空に近かったけれど——は天井に届くくらいの大きさだし、水道も使い易そう、というからお湯まで出るのかこいつ。焔炉は二つ付で換気扇まで付いてらあ。びっくりするくらい一般的な家庭と一緒に、寮って全部屋がこんなにも快適空間なのか？

「——ん？」

こんなものまであるのか、とキッチンの食器乾燥機に驚いた後、食器棚に視線を走らせた俺。食器棚の一部に食器ではない何かがあるのが目に入る。気になって棚に手を伸ばすと、丁度キッチンに稜先輩がやって来た。

「ん、何か取んの？」

「い、いえ、別に」

「——嗚呼、それ俺の薬」

別に悪いと決まった訳じゃないのに、俺は少し慌てて手を後ろ手に引っ込めた。しかし稜先輩は俺が引っ込めた手の角度を頼りにそれに気付いたらしく、何が楽しいのかははっと小さく笑い飛ばした。薬——？ 風邪薬か何かなのだろうか？

「あんま気にすんなって」

「は、はあ」

後頭部で腕を組んで、稜先輩は再び共有ルーム——次からはリビングと呼ぼう——に戻っていつてしまった。ん——…深い意味は無いのかな、此处でツツコむ必要は無いだろうから、俺もキッチンの散策を止めてリビングに戻った。ただ薬の場所はちゃんと覚えたぞ、何時取ってくれて言われても大丈夫だ！

「さって、じゃあ行きますか！」

俺が着いて来ているのに気付いたのか、稜先輩はパンツと手を叩いてくるりと振り返た。え、何処に？ 嬉々とした表情を浮かべている稜先輩の意図が分からずに困惑する俺、ええと、どっか出掛けなきゃいけない用事あっただろうか？

「ばあか、お前の歓迎会に決まってるだろ、とっとと買い出し行くぞ。勿論俺の奢りだからよ！」

俺の、歓迎会……？

「え、嘘、歓迎……してくれるんですか……？」

「勿の論だろ、俺一年間ルームメイト居なかったんだぜ？ そりややるだろー、センパイの俺が」

——うっかり泣きそうになりました。

い、今迄歓迎とかそういうのされたこと、な、無かったから……
う、うああああああ……！！

「……ちよ、しず、静流!？」
おま、え?
か、歓迎会くれエで泣くなよ!……」

「な、泣いてませんもん、な、泣いて……泣いてえええええええ！」

「とりあえず落ち着け静流、俺が着替えてくる間に落ち着いとけ！」
「うわあああああああ！！！！！！」

うっかりどころか初日にして俺号泣。人間ってこんなに温かな生き物だったんだなあ……。俺、そういうの忘れてた。

裕福だけど寂し過ぎる生活に耐え切れなくて此処まで来た俺だから。やっぱり梁瀬静流でなければ味わえない温かみってあるんだよなあ、良いとこのボンボンだった俺では絶対に有り得ない優しさっていうの？

——俺、この至福の時を失いたくない。

着替えを終えた稜先輩は、さっきまでのぐだぐだ感を全く感じさせないおつとこ前な格好で部屋から出て来た。俺は制服のままだけどまあいっか、稜先輩に連れられて、俺は寮を後にしたのだった。

・ 素晴らしき平凡な日常。

「静流、なあにニヤニヤしてるんや？」

——はっ。

ええと——オッス、オラ梁瀬静流。昨日からこの雅一魅剣学園の一年生で、そんな俺の為に同室の先輩がやってくれた歓迎会のお陰か、心暖かく次の日を迎えることが出来たんだ。今日も明日も明後日も、この平和な日々が続くと思うとどうしても顔が綻んじまうぜ、明日のことを考えると、オラわくわくすっぞ！

——色々と間違えた、俺はこんなキャラじゃなかった気がする。

という訳で。

昨日の今日だから、という訳でも無いだろうけど——今のテンションならもう一年はこの話で笑える自信ある——、今の俺はメッチャ良い笑みを浮かべている。今、というのは本日最後の授業である六限目の今であり、教師陣が誰も居ない自習タイムな今を差す。自己紹介やこれからの授業内容を説明して終わる授業を五時間すっ飛ばして、異例にも最初の授業が自習という化学の授業こそがコレだ。まあ、化学の担当がクラス担任だからなのかもしれないけど、自習な分には文句を言うまい。それなりにがやがやと騒ぐ我がクラスメイトを横目に、俺はそれすら笑顔の足しにして柗臣くんを見た。

「え？ 別に？」

「別に、って顔してへんよそれは。良いことでもあったんちゃうの？」

いやあ、クラスメイトが俺に気を遣わず騒いでるのが嬉しくて、なんて言ったところで柎臣くんにしてみればもはや気持ち悪いの域に達するであろうから、俺は最初に語った方の理由を柎臣くんに話すことにした。

「昨日さ、ルームメイトの先輩が俺の為に歓迎会してくれたんだ」

今の笑顔プラス三割増でそう告げれば、柎臣くんはほお、と感嘆の声を上げた。えへへ、良いでしょ、すごい自慢したい。歓迎会って言ったって料理作ったのは俺だし、稜先輩はホントお金出してくれただけなんだけど、俺にとってはその気持ちだけで泣ける程嬉しかった（ていうか実際泣いたし）。

「静流、ルームメイト先輩やったんやな。三年間寝食を共にする訳やし……まあ静流の場合は二年か、ええ人やったんなら良かったな？」

「うん、とっても良い先輩だよ。柎臣くんは？」

「俺？ 俺は同年の奴なんやけどー……」

寮は即ち家、その家に居るのが自分とは馬の合わない人だった、なんていうのは確かに嫌だ。学年の半数以上は同学年の人がルームメイトになるんだけど、俺は運悪く——今思えばとても良かったけど——も上級生の稜先輩がルームメイトになった。最初は確かに不安だったつけ。

柎臣くんは俺の問いに対して少しの情報を口にすれば、少し考えるように前方の扉に視線を向けた。

「けど……?」

「ごっつい目力強い奴で会ったらびっくりすんで、スポーツ推薦でここ入ったらしいけど」

「へえ……。楽しくやれそうなの？」

「んー、要努力、やな」

まあ知ってたけどね。ごっつい目力強い奴って称した人と仲良くやれてるとは流石の俺も思わないし。スポーツ推薦っていうとアレか？ 全身からアドレナリン常に放出って感じ？ 俺は脳裏に柎臣くんのルームメイトを思い描いてみつつ、苦笑する柎臣くに頑張っ、と一言呟いておいた。

魅剣のコース制度は面倒臭くて、かなり多過ぎて俺は把握し切れてない。でもまあ学年じゃあ千を越える大所帯だけど、俺の居る特進コースってのはたったの三クラスしか無いんだ。その中でも俺が所属するのは全コース総計してもトップクラスのαクラス、後はβクラスとγクラスの二クラスしか無い。競争率は無駄に高いし頭の良いスポーツ推薦も多く取られてると聞いた。一クラス三十人しか居ないんだぜここ、特進コースはまるまるひとつの館を使ってるから他のコースの人に会うことはほぼ無いし……。え、学年で九十人？ 友達百人出来るかな？ 出来ねえじゃねえか。

「今度会ってみたいな、その、柎臣くんのルームメイトに」

「ははっ、せやな、今度部屋遊びに来ィや、歓迎すんで？」

「うん！」

畜生超嬉しい……。友達に誘われるだなんて夢みたいだ！！

俺はそんなことを考えつつ再び妖しくなっているであろう笑みを浮かべた。普通に笑えるように頑張ろう、あ、無理だ、嬉し過ぎるんだもん。

という感じで本日の授業は終業を迎えた。お互いのルームメイトの話なんて、何だからしいじゃないか！ 担任が居ないからこのまま帰宅しても構わないという訳で、俺は向いていた方向を後ろから前に戻して横に掛けていた鞆を取り出した。

そういえば、忘れていたけど今日の俺って何とも平凡な一日を送ってない？ 朝学校に来て普通に授業を受けて、そしてこれから寮に帰る。——だなんて、生まれて十五年、一度も無かった平凡さだ。……あれ？ 本当に無かったのか？ ええと……——うおおおっ！
！ 本当に無え！！ 俺の十五年って本当に何だったんだ！？ 今日を差し引いて普通だった一日を考えて浮かんで来たのは、そろそろ我慢の限界に達したとある日に、小学校にすら行かずして家出をしたその日だった。

——まあ、夜になっても帰って来ない俺を心配して、両親が会社のヘリを総動員したんでやっぱり平凡とは無縁だったんだけど。あの時誓ったね、二度と門限破りなんてするもんか——って。街の皆様に迷惑掛けてたまるか。

「あれだけ低空飛行するヘリコプターを、俺は一生忘れないね……」
「静流、幸薄ッい顔してるところ悪いんやけど」

教科書類を律儀にも鞆に詰め込んでいれば、荷物をまとめ終わった柎臣くんが苦笑を携えて俺のポケットを指差した。携帯？ ……
おお、電話か。

「稜先輩だ」
「……リヨウ……？」

ポケットから白——正しくはメタリッククリアだったつけ——の携帯を取り出せば、どうやらメールだったらしく青いランプがチカチカと点滅していた。ちなみにこの携帯の番号を知っているのは稜先輩と柎臣くんだけ、両親には教えていない。俺から連絡することはあっても非通知ですからあっちには分からないし、権力を振り

翳して調べようものなら二度と家に戻らない、と伝えてある。傲慢で高飛車な両親だけど、たった一人の息子にだけはとことん甘い、……これだと、俺も立場を利用してるみたいだけれどさ。

しかし今、俺が気になるのは柎臣くん。先輩の名前を聞くなりあからさまに表情を歪めたんだけど、うん？ どうしたんだろう？

「なあ静流、その先輩の名前って、五稜郭の稜っつー漢字ちゃうよな？」

「え？ あ、ええと……うん、そうだよ」

少し難しい言い回しに少々時間を食ったが、確か五稜郭もそんな漢字だったと思う。そう在り来たりな漢字では無いと思うんだけど、もしかして知り合いなのかな？

「でもアレか、漢字が一緒やからって決まった訳ちゃうやんな……」
「……柎臣くん？」

「へ？ あ、ああ、何でもないわ！ そんなじゃ俺おッ先、じゃな！」

「う、うん」

どうせなら苗字までちゃんと教えてあげようかと思ったんだけど、そんな俺の考えとは裏腹に、柎臣くんは踵を返して教室を後にした。ふむ、一体どうしたというのだろうか。

教室に一人ぽつんと残された俺は自分も帰るか、と鞆を閉じ、そういうば来ていた例の稜先輩からのメールを確認しつつ教室を後にした。

あ、ついでに夕飯何が良いか聞いてみよーっと。

5月、家政婦が、見た……？

ふう、これで完☆璧。

俺はピカピカになった——というか、俺がやったんだけど——我が自室の共有ルームを見て、爽やかに笑みを零した。前からそこまですわかったという訳では無いんだけど、ほら、ここに来てもう一ヶ月になる訳だから？ 一ヶ月もお世話になったこのお部屋様に恩返しということ。

——とまあ、部屋の掃除をした理由を慌てて述べてみたけど、ぶっちゃけ特にこれと言った理由は無い。ただ五月に入ったというところで、GWゴールデンウィークなる行事があったというだけ。五日間に渡る休日をはり過ぎしているのも勿体無いし、親元へ帰るなんてことをする予定も無い。

「だったら、掃除するしか無いよねっ！ って訳です」

「……そう」

エプロンと三角巾をばっちり装着して、稜先輩に古典的だと苦笑されたはたきを片手に、今さっき帰って来た稜先輩に急に始まった大掃除の理由を説明した俺。

「まあ、良いんだけどな？ でもオマエ一人にやらせたの悪イなーって思ってるよ」

「いえ！ 俺、掃除好きですから!!」

声を大にしてそう言えば、稜先輩は今一度、ピカピカになった部屋を見回した。

「料理も出来て掃除も出来んじゃないあ……オマエ、良い嫁さんになるな……」

「え、ホントですか！ やった！」

「褒……めてねえんだけどな、うん、いや、褒めたのか？ ……」
アレ？」

やった！ 家が家だけあって、俺はとっとと婿養子に行きたい
と思っっているものだからそれは嬉しい一言だ！

言った先輩本人は自分の発言に自信が持てなくなっているようだが、今の俺には一切切関係ない、というか聞こえていない。元氣百倍シズパンマーン！！——少し自重しよう。

さあって、この調子でキッチンの掃除も——そう俺が口走った時、先輩が元々鋭い視線を俺に走らせたんだけど、何かを言おうとしたらしい言葉は、部屋に鳴り響いたインターフォンによって遮られた。

「あ、俺出ますね」

「あ、嗚呼」

一体何を言おうとしたんだろうか、気になっていない訳では無いけど、今はお客さんを待たす方が失礼にあたるだろう。恐らくは稜先輩のお客さんなんだろうが——だって俺友達証臣くんしか居ないもん——、何となくそうなっている規則に従って、俺は外へ繋がるドアを開けた。

「はーい！」

なるべく元氣良く、をモットーに返事をすれば、開け放ったドアのその向こうに居たのは。

「あ、えと、すみません」

麗しきも可愛らしい少女であった。

少女は小さく、本当に小さく頭を垂れば、ちらりを俺を一瞥した。驚いたような表情で彼女を見ていた俺はすっかり目が合ってしまい何だか気まずいんだけど、俺は取得していたけれど使う機会が無かったスキル…社交性をフル活用して言葉を紡いだ。

「ええと、どちら様ですか？ 稜先ぱ——有哉木先輩のお知り合いの方で？」

「有哉木……！ やはりここが……！」

「え、あ、あの？」

有哉木——あまり聞きなれないその苗字を耳にした瞬間、少女はカッと目を見開いて片手を顎に置いた。……え、何？ この子知り合いじゃないの？

「え、あ、すみません、アナタ様はこのお部屋の家政婦様か何かでしょうか？」

「俺ですか？ や、違います、普通にこの部屋の人です」

そういえばそうだった、俺家政婦みたいな格好してたんだった。

こ、こんな格好でお客様を迎えてしまったなんて俺としたことが！

今思えば結構恥ずかしい！！

慌ててエプロンと三角巾を外していれば「ということは、有哉木がアナタ様にそのような家政婦染みたことをやらせて……！」なんてことを口走ったものだからちゃんと否定をしようと——したんだけだね。

「家政婦様、御免！」

「へ？ いや、だから俺は家政婦じゃなくて——ちよつと君！！」

決意を秘めたようにぐん、と視線を上げた少女——と言っても年齢俺と変わらそうだけど——はそれだけ言っただけ俺の横をすり抜け部屋へ侵入した。……ちよ、ちよつと靴脱いで！！

「有哉木稜！ 貴様がここに居るのは分かっている！ 抵抗せずに出てくるが良い！」

「ちよ、ちよつと君！？」

「あ？ 誰だったんだよ静——だあッ！！」

先輩は、丁度冷蔵庫から清涼飲料水を取り出しているところだった。何時だって眠そうなその表情をこちらに向ければ、あからさま目を見開いている。どうやらこの少女は歴とした先輩の知り合いだったらしい。

当の少女はというと、きよろきよろと部屋を見回しては「なんとこの清潔な環境……！」と驚いていた。へへっ、凄いだろ、これ俺がやったんだぜ。自慢したかったがここで話をややこしくするのはどうかと思ったので黙っておくことにした。

「お、ま、何で魅剣に居んだよ！」

「ふんっ、愚問だな。今年からこの生徒となったからに決まっておろう！」

稜先輩は飲み物片手に空いた手で少女を指差し、少女は腕を組んでそう吐き捨てる。何か変わった口調の子だなあ……。

「オマエの頭で入れる程魅剣甘くねえだろうが！」

「ぐっ……う、五月蠅い！ 私は推薦コースだから良いんだッ！」

うん、どうやら仲は良いようだ。

すっかり蚊帳の外に追いやられてしまった俺は、仕方がないのでソファに座っておくことにする。この騒ぎ、何時終わるんだろうなあ。

「――でも、榎臣は特進で入った」

とか。

……アレ？ 今知ってる名前が出てきた……？ 座ったソファの後ろで繰り広げられてる会話に視線を向けてみたら、ちょうど真剣な表情で固まっている先輩が目に入った。

「……嘘だろ？」

「本当だ、この部屋も榎臣に聞いて知った。貴様だという保証は無かったが――その家政婦様に聞いたのでは？」

「……静流、本当か」

「え！？」

驚いていた先輩の視線が俺に向いた、って、ていうか怖え！ 疑問符になってない疑問とか超怖え！ な、な、何か俺、悪いことしたのかな……。

「え、えと、ま、榎臣くん……には、稜先輩の話は特に……」

「本当か」

「はい！ な、名前なら、多分言った、かも、しれま、せん」

沈。

怖い、とにかく怖い、少し前とは違った意味で涙腺が崩壊しかけた時、「そうか、分かった」と、先輩が笑った。おおおおおおおお、こおおおおおおわかったああああああ！！！！！！！！

「名前だけで見つけてくるとか、オマエ等何なんだよ……」

「ざまあみろだ」

「俺が、何の為に、ここ……に——ッ！」

先輩の何時もの笑顔を見てすっかり安心し切っていた俺は、とりあえず崩壊しかけた涙腺に防波堤を張ることに必死だった訳だけど。

「なっ、——お兄ちゃん!？」

少女の方の発したその言葉に再び気が向いて振り向いてみたら。

——苦しそうな、膝から崩れ落ちたであろう稜先輩がそこに居た。

「せ、先輩!？」

な、何!？ 何があったの!？ 俺は何が起こってるんだが全然意味が分からなくてとりあえず少女同様に先輩に駆け寄ってみるけど、先輩は「何でも無えよ、何でも」だなんてあからさまな嘘を吐

くだけだった。どう見ても苦しそうなのにそんなことを言うんだから、ええと、本当にどうしよう。

「……おい、兄上」

「オマエは……本当にころっころ呼び方が——」

「そんなことはどうでも良い!! 貴様、まさかルームメイトである家政婦様に言っていないのか!？」

……うん？

苦しそうではあるが本当にそうでも無かったのか、稜先輩は立ち上がって歩き出す。息が荒い気もするんだけど、……俺の気の所為だったら良いな。

「お、おい! 何処へ行く! 未だ話は——」

「悪い静流、ソイツ、俺の妹なんだわ。……適当に持て成しておいてくれ」

「は、はい」

「兄上!!」

ばたん。

きつとそれは、先輩の部屋の扉が閉まった音。俺は結局最後まで何が何だか分からないまま、ただただ先輩の後ろ姿を見ているだけだった。本当に一体何があったんだろう、ていうか榎臣くんの名前も出て来たし、……ええと。

今はとりあえず、

「あの、お茶出しますんで——靴、脱ぎませんか?」

部屋の中だから、ね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7066i/>

普通で非凡な御曹子！

2010年10月14日15時23分発行